

そんななかで、離婚したばかりの主人公と育ての親である祖父母を失ったばかりの従姉妹のちどりがイギリスの辺境を旅するよしもとばなな氏の「スナックちどり」(文藝春秋)はなにげない会話のなかに、真の対話が成り立っているすぐれた小説だと思った。二人の言葉のなかに人間の心の深い部分が込められていて、はっとすることがたびたびあった。たとえば、女性が「おばさんになり、おばあさんになること」について、ちど

## 文化ときめき

### フィンランディア「完成形」

フィンランドの作曲家、シベリウスの代表作である交響詩「フィンランディア」の新たな校訂譜を、東京ニューシティア管弦楽団常任指揮者の内藤彰さん(写真)が完成させた。16日午後2時半から東京・池袋の東京芸術劇場で開かれる、同楽団定期公演で初披露する。

この曲は、1899年にヘルシンキで劇付随音楽の終曲として初演され、1900年のパリ万国博覧会で独立作品として初めて演奏された。オーケストラ譜スコア)は1901年に出版され、現在使われている楽譜も、これに一部修正を加えたものだ。

しかし、「この楽譜は作曲家の意向が十分に反映されていない」と内藤さん。

### シベリウスの修正を反映

指揮者・内藤彰さん

パリ万博で演奏された時に一部改訂されたが、作曲家がその後、自筆譜を紛失した上、初版譜も多忙で完全にチェックできなかった。このため改訂箇所を反映や誤りの修正が行われず世に出してしまったという。「スコアに自ら修正を加えて振ってきた指揮者は少なくない。初演から1世紀以上がたった今、あらためてスコアに作曲家の意向を反映させたい」



内藤さんは2011年から、シベリウスの資料を保有するヘルシンキ大学図書館などに問い合わせ、ヘルシンキ初演時のパート譜や作曲家自身のピアノ編曲版、自筆譜コピーなどを集め、校訂作業に着手した。

校訂譜は冒頭のティンパニのトレモロに、いったん休止を入れるなど、聴いてすぐわかる変更点もある。「パリ初演後に出版されたピアノ編曲版自筆譜に基づき、テンポやリズム、強弱などを多数変更しました。これが最も完成された形でしょう」と内藤さん。

「帝政ロシアの王政下で、祖国への愛や独立への希望を描いた作品本来の姿が、より力強く、鮮明に表れた。真の姿に一步近づいたと思う」

6. 03・59333・3266  
(奥田祥子)



東京都千代田区で